

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## In Honour of Professor Ichiro Hayashi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1988-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 榮一, Kimura, Eiichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2232">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2232</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 林先生の思い出

木村 榮 一

大学の二年生というから、今から二十五年前のことになる。あれはたしか訳読の授業だったと思うが、予習をしている時にひどく難解な個所にぶつかり頭を抱えてしまった。ここが当たるとことだと思ひながら授業に出たが、さいわいその文章はべつのクラスメートに当たった。貧乏くじを引いたクラスメートは苦勞してなんとか日本語にしようとするのだが、どうしても訳すことができず、ついに窮して「意味は分かるのですが、うまく日本語になりません」と答えた。すると、林先生はぎょろりと目をむかれ、「意味が分かれば、日本語になるはずです」とびしゃりと言われ、そのあと、文意を説明して明快な日本語訳をつけられた。その時に、なるほど、正確に意味をおさえてテキストをしっかりと読めば、意味がとれて日本語に訳せるものだと感心したが、目から鱗が落ちるとはあのようなことを言うのだろう。

林先生には、文法の手ほどきから文学的なテキストの読み方、さらにはスペインをはじめ欧米や日本の文学についてもいろいろと教わった。授業は明快そのものだった。むろん、これはすらすら分かったということではなく、先生がこちらの程度に合合わせて講義されたということで、今にして思えばその辺はなかなか曲者であった。

文学のテキストを、一語一語おろそかにせず、しかも文学作品として味わいながら読む術を教わったが、これはなにものにも替えがたい体験であった。しかし、なにごととも良いことづくめでないのは世の常で、今だに授業が恐ろしいのは、どこかに林先生の目が光っているような気がするせいかも知れない。

授業は厳しかったが、要所をきちんと押さえて簡潔明快に説明され、無駄

口を叩かれることはほとんどなかった。こう書けば、厳格一点張りの頭の固い教師を思い浮かべられるかも知れないが、けっしてそんなことはなかった。快活で、世情によく通じ、文学的感性の豊かな方で、それは若くて颯爽としていた頃から今も変わっておられない。

神戸外大に残ってからは、暇さえあれば林先生の研究室にお邪魔するようになった。その時にいろいろな話を聞かせていただいたが、中でも昭和二十六年四月に外大に赴任されてからのことや、三十七年にイスパニア学科をほとんど独力で創設された時の苦労話は今も記憶に新しい。それにしても、あの時もしイスパニア学科が新設されていなかったら、自分は今頃どこをさまよっているだろうかと思うと、改めて縁というものについて考えさせられる。

その時に聞かせていただいた文学論、翻訳論、テキストに対する心構え、文学書の読み方と楽しみ方、本の収集法などは、とてもここに書き尽くすことができないので割愛するが、自分にとってそれがこの上ない財産となっている。むろん、いつもそんな七むずかしい話ばかりしていたわけではない。人生経験が豊富で世情に通じておられる先生から、いろいろと興味深い話を聞かせていただいたが、そのうち先生が座談の名手であることに気付いた。座談というのは意外にむずかしいもので、なりよりも知的で面白くなければならない。悲憤慷慨やあてこすり、他人に対する批判などは語り手の品位を貶めるので、禁物である。また、聞き手がいる以上、相手の立場や性格を考慮した上で要点を押さえ、強調すべきところは強調して語らなければならない。林先生の座談はその点でも名人芸というほかはなく、聞き手はいつしか話に引き込まれてしまうが、そこには自己喧伝や自己卑下の臭みがまったく感じられない。文学というのが帰するところ、なにをではなく、いかに語るかに尽きるとすれば、巧みな語り口で人を魅了する林先生の座談はまさしく一個の文学作品であると言っても過言ではない。

林先生は趣味もまことに多彩で、いろいろな趣味をお持ちだが、とりわけ釣りと大工仕事は素人離れをしている。このふたつはともに、まずしっかり

した良い道具を揃え、その上で釣りなら狙った獲物を仕止めるべく、季節、天候、潮回り、仕掛け、餌などを考えなければならないし、大工仕事なら素材をよく吟味し、作ろうとするものをまずイメージとして思い描かなければならない。その意味でこの両者はまことに知的なゲームであり、じっさいに竿をおろしたり、鋸やカンナを手にする前に、想像力と思索のために長い時間を費やさなければならない。林先生の徹底ぶりは人も知るところで、道具と素材は納得がゆくまでじっくり選び抜かれ、いいかげんなところで妥協するということがない。そこから生まれてくるのは、当然のことながら一級品であり、鉤にかかってくるのは目ざす魚である（もっとも魚釣りのほうは、偶然に左右されることが多く、さすがの名人も時に無然たる表情を浮かべられることもある）。こうした姿勢は、年来続けておられるスペイン詩の研究にも通底している。いや、むしろその逆だと言うべきだろう。先生は素材（テキスト）と道具（研究書）を徹底的に吟味し、じゅうぶんに納得した上でなければ用いようとせず、そのあとじっくり時間をかけて仕事にかかるという研究者の本来あるべき姿勢を頑固に守りつづけておられるが、それがそのまま趣味にも投影されていると見るべきだろう。

林先生は若い頃から、スペイン黄金世紀の詩を中心に営々として研究をつづけてこられた。本腰を入れてその研究に取り組み、年来の成果を論文にまとめようとした矢先に、学生部長に選出され、以後数年間、その仕事に忙殺されることになった。学生部長をやめられて、ほっと一息つかれた時に、これからは《涿の鯰》になると宣言された。牛汗充棟とという言葉がぴったりの書物で埋もれた書齋と研究室を深い涿になぞらえ、そこで研究三昧の生活を送るつもりでそうおっしゃったのだろうが、やがて昭和五十八年七月には学長に選出された。あの時は端目にも痛々しいほど悩んでおられたが、ほかの人に迷惑がかかってはいけないと判断され、自分の研究を当座断念することにして学長職に就かれた。それから退職されるまでの四年間は文字通り名学長として辣腕をふるわれ、大学移転、新学科創設をはじめとする難問を次

々に処理された。しかし、激務がたたり健康を害されたために、昭和六十二年六月に学長職を退かれることになった、かねがね口にされていたとおり、学長職と同時に大学も退職されることになった。イスパニア学科の教員はもちろんのこと、他の先生方もせめて停年まで残っていただけないかと懇請したが、性剛直な先生の翻意を促すことはできなかった。

退職後は悠々自適の毎日を送られ、体のほうも少しずつだが良くなっておられるとのことで、ほっと安堵の胸を撫でおろしている。今後は中断されていたスペイン詩の研究に没頭され、そのお言葉どおり《淵の鯨》となって、詩文の世界を悠々と泳ぎまわり、これまでの研究の集大成とも言うべきスペイン詩論を一日も早く完成させていただきたいと願っている。